

チーム力を生かした2つのアプローチ形成による授業づくり

ハイライト：組織的研修

- ・組織的研究推進によるアプローチ形成
- ・日常的研究推進によるアプローチ形成
- ・授業づくりが効率的にすすむ研究組織をつくる
- ・チームで授業をつくる
- ・チームで協議会をつくる
- ・チームで報告会をつくる
- ・久原小学校の組織的研修の成果と課題
- ・資料（研究通信）

組織的研究推進によるアプローチ形成

本校では、組織的研究推進によるアプローチ形成とは、公開授業にかかわる研究推進の在り方をマネジメントしていくことであると捉えています。

まず、研究主題の具現化に向けて、部会ごとに指導内容と方法を検討し、1学期に公開授業を実施していきます。その際、部会ごとに協議会を位置づけ、リーダーを中心に本校がめざす授業づくりの基礎・基本を確かめ合います。また、成果と課題については確実に整理しておくことを大切にしました。

次に、各部会での研修内容については、夏期研修会を企画し、その中で各部からの「これまでの実践と今後の方向性」というタイトルで実践交流会形式の研修会（中間報告会）を実施することで、学校全体での研究の共有化を図ります。

夏期研修会で明確となった課題をもとに、2学期に再度、数本の公開授業を実施することで、主題研究における財産の蓄積を可能にしていくものと考えます。

そして、3学期は、1～2学期の実践を学校全体で検証する場としていきます。同時に、組織的研究推進による効果を学力向上の面からも分析、考察していきます。検証の方法としては、年間テスト結果のデータ分析、児童の自己評価、教師の自己評価、または、外部評価等が考えられます。

さらに、1年間の授業改善について、部会の情報を共有し合う「年度末報告会」を設定することで、次年度の授業改善の方向性を明らかでき、さらなる進化を生み出すことができます。

日常的研究推進によるアプローチ形成

校内研究推進の鍵は、研究の日常化にあります。研修会が目的で終わってはならないのです。研修会は日常の授業づくりに生きて働く手段にならなければ、効果的な研究推進はあり得ません。そこで、各部による研究推進と同時に日常的な研究推進のアプローチ形成が重要となります。各部で研修した内容を全教師が日常の授業づくりで活かす方を構築することが大切です。

具体的には、定期的に「授業参観指導月間」を設定して、管理職、主幹教諭等が中心となって、参観指導を実施します。

そして、授業者は、参観者に対して「本時の私の授業は、研究テーマの〇〇を目指して、△△についての学習内容を■の方法で実施します」とはっきりと言える習慣を身につけ

ることで、主題研究に即した日常的授業実践が可能となります。参観指導については、指導案の作成の必要もありません。前述した内容を授業者が明確にもった授業づくりを推進していくのです。

また、先生方が、授業づくりが思うように進まずに、悩むこともあるでしょう。困った時は、一人で悩まず、一人で抱え込まず、その都度、周りの先生に相談できるようにしていくことが大切です。それが協働的研究推進となります。決して背伸びをせず、小さな成功を重視した研究推進を心がけることが大切になってきます。何が出来なかったのかよりも何が出来たのかを大切に、日常の授業改善に努めること重視するものです。

授業づくりが効率的にすすむ研究組織をつくる

校内研究を効率的に推進していくためには、組織づくりを見直すことも必要です。

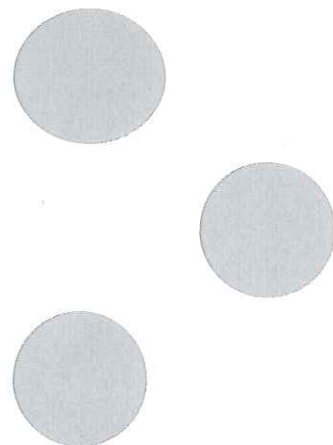
教科別の部会に分かれていることで、研究主題の共有化を十分に図れないことがあります。このような場合は、多方向に向けたベクトルをリンクさせる必要があります。

そこで、教科部から近接学年部へと組織の改善をし、研究を推進していきます。これは、児童の発達段階に応じた組織化となり、チームとして研究の推進を図ることが可能になります。研究を推進するにあたって、効果的、効率的な組織となります。

研究推進委員会の組織については、校長、教頭、主幹、研究主任、そして各部の代表で構成することで、機動性を高め、効率的にすすめていきます。学力向上部長は、状況に応じて参加する体制をとっていきます。

このような組織づくりを行うことで、迅速な意思決定が実現でき、多様なニーズに対応することができるようになります。また、部の代表のミドルリーダーとしての職能を発達させていくことにもつながっていきます。

協働的な研究をすすめていく上では、「どのような組織をつくるのか」が重要なポイントとなるのです。



チームで授業をつくる

公開授業を通して校内研究をすすめていくにあたって、課題となることがあります。それは、授業づくりが授業者任せになりがちになること、公開授業の成果と課題が他学年・他学級の日常授業に十分に生かされていないことです。これらの課題を解決していくことができるのが、チームでの授業づくりです。

1学期間に設定する研究授業は、公開授業と参観指導のどちらか1つにします。そして、授業日の設定をチーム内でバランスよく調整し、授業までの具体的な見通しをもてるようにします。



そうすることで、近接学年研修会の時間を効果的・効率的に活用し、指導案の審議や空授業をしっかりと行うことができます。

また、同学年、近接学年の学習を研究していくことは、日常の授業を見直し、児童に実態や発達段階を意識した授業改善につながります。主題研究が日常授業に生かされていくことになるのです。

2つのアプローチ
形成による双方向
の研究推進が着実
な進歩を創ります

チームで協議会をつくる ～KJ法～

公開授業での協議会が一部の先生方の発言ですんでいることはありませんか。協働的な研究推進を進めていくには、参加しているすべての先生が、主体的に協議会にのぞみ、お互いの考えを出し合えるようにしていくことも大切です。そこで、協議会の進め方にKJ法を取り入れてみることも改善に

つながります。

ここでのKJ法は、公開授業の参観時に見取った子どもの姿や手だてを付箋に記入し、協議会に持ち寄ります。そして、その共通点や差異点から、授業を分析していくこととなります。授業の見取りが焦点化し、授業の成果と課題を共有化することができます。



報告会は、授業
改善の手だてを
継続・進化させて
いきます



チームで報告会をつくる① ～中間報告会～

1学期に行った各部会での研修内容について、夏期研修において実践交流会（中間報告会）を企画します。

「中間報告会」を行うねらいは、次の2つになります。

- ① 情報の共有による授業改善
- ② 自己実践の評価による授業改善

夏期研修時では、1学期の公開授業と日常授業参観指導を通して、チームごとの成果と課題が少しずつ明らかになってきます。また、授業整理会で協議された内容や講師の先生方からの指導内容には、授業づくりにおいて、価値ある内容がたくさんあります。

しかし、これらの内容は、まだ全体で共有することができていません。

そこで、「中間報告会」で、それぞれの成果と課題を発信し合い、共有していくことで、2学期の授業づくりに生かしていきます。

また、「中間報告会」で発信していく内容を検討していくことは、1学期に行った実践を自ら評価していくことになります。自分の指導のよさと改善点を分析していくことは、2学期の授業改善の方策をより明確にすることができま

す。
1学期に学んだアイデアを出し合い、よさを取り入れていく報告会をつくっていくことが、組織的研修をより質の高いものへと高めていくことにつながっていきます。

チームで報告会をつくる② ～年度末報告会～

2学期以降に行った各部会での研修内容について、年度末に2回目の実践交流会（年度末報告会）を企画します。

「年度末報告会」を行うねらいは、次の3つになります。

- ① 情報共有による授業改善の進化
- ② 自己実践評価による授業改善の進化
- ③ 来年度の授業改善の方向性の明確化

中間報告会では、成果と課題を発信し合い共有していくことで、2学期以降の授業づくりに生かしてきました。

そこで、年度末に報告会を企画し、1年間の授業改善についてお互いの情報を共有し評価し合うことで、さらなる

進化をめざしていきます。

「年度末報告会」で発信していく内容を検討していくことは、1年間に行った実践を自ら評価していくこととなります。自分の指導のよさと改善点を分析していくことは、来年度の授業改善の方策をより明確にしていくことにつながります。

このような評価を個別で行うのではなく、協働的研究をすすめてきたチームで行い、報告会で共有化していくことは、チーム力の向上を図り、さらには授業改善の進化につながっていきます。

チームで報告会をつくる③ ～子どもの姿と手だてを発信～

報告会では、それぞれの部会から実践報告をしていきます。では、その内容は、どのようなものになるでしょうか。

例えば、実践報告のプロットとして、「国語の授業改善」「算数の授業改善」「チームで近接学年研修会で取り入れた指導方法」という3つを設定します。

そして、授業での子どもの姿を具体的に示し、「なぜその姿を生み出すことができたのか」有効だった手だてを発信していきます。また、十分に達成できなかった子どもの姿も

示し、その要因と改善策を発信していくことも大切です。そのことが研究の方向性を明確にしていきます。

また、「チーム内でどんな指導方法を取り入れてきたのか」「どのようにチーム力が高まってきたのか」組織的研修の成果と課題を示し、その要因と改善策を発信していくことも大切です。

研究主任が、報告会のねらいを確認し、報告後に学校全体としての成果と課題をまとめることも必要です。

久原小学校の組織的研修 ～成果～

本年度の久原小学校で行った中間報告会において共有した組織的研修についての成果は、次のようなものです。

【低学年部】

- 指導の共有化をする
音読の指導、辞書の活用、
板書の構造化、説明活動の指導

【中学年部】

- 協議会の内容を日常授業に生かす
指導事項と言語活動、板書構造化
交流活動のねらいと支援

【高学年部】

- 協議と指導を生かす授業改善
指導事項と言語活動、表現活動
交流活動のねらいと支援

【特別支援部】

- 情報交換と専門性の向上
子どもの見取り方、指導内容改善
指導方法改善

チーム力を生かした組織的研修を行ったことで、チーム全員が授業の創り手となり、チーム全員が授業を通して学び手となりました。このことで、授業改善と協議会の充実を図ることができました。

また、報告会にかかわる職員の真摯な姿勢も成果として挙げられます。

報告会に向けて資料の準備を分担したり、報告内容の修正点を協議したり、お互いに1学期の実践を価値づけるなど、よりよいものをつくり上げていくために、すべての職員が協働して真摯に取り組んでいくことができました。

このように、チーム力を高めていくことで、個の指導力が向上し、子どもの学力の向上につながっていきました。学校として確かな成果を示すことができたものと捉えます。

久原小学校の組織的研修 ～課題～

本年度の久原小学校で行った中間報告会において共有した組織的研修についての課題は、次のようなものです。

【低学年部】

- 近接学年研修会の内容方法の充実
課題の重点化、指導の計画性

【中学年部】

- 近接学年研修会の内容方法の充実
評価規準の具体化、計画性と資料

【高学年部】

- 近接学年研修会の内容方法の充実
見通しをもった授業づくり

【特別支援部】

- チームでの協議内容の充実
専門的な研修、連携した支援

「近接学年研修会の内容と方法を充実していくこと」が共通した課題となっています。職員の指導力の向上に応じて、職員自らが、研修の内容と方法について、その質を高めていかなければならないと感じています。

近接学年研修会の内容と方法を充実させていくためには、教師の目が輝く研修をつくり出していくことが必要となります。

子どもたちが、学習に取り組む際、明確な課題意識をもっていれば、その学習はとても有意義なものとなります。教師にとっても同じで、授業づくりについて明確な課題意識をもっていれば、よりよい授業をつくり出していくことができるのです。

そのために、近接学年研修会の実態に応じたきめ細やかなアプローチが大切です。研修の準備を分担したり、授業のよさと修正点を協議したり、価値づけたりしていく際に、管理職や研究主任が的確な指導・助言を行っていかねばなりません。時には外部講師を招聘して指導を受けることも必要となります。教師のニーズにしっかりと応えていくことが大切です。

久原小学校は、
チーム力を生か
して授業改善を
すすめています

